



JazzMeBlues



とある街にあつBAR
酒と酒場の人間模様

jazz me blues。

Hot battered Rum



重い櫳の木の扉を開けた。
凍てつく夜だった。
おもむろにカウンターへ向かい、
「[Hot battered Rum](#)」
を頼んだ。
白いバーコートに蝶ネクタイをした初老のバーテンダーは、
「お寒いんですね。」
と一言いい、
グラスにダークラムをそそいだ。

BAR「浪漫倶楽部」との出会いはここから始まった。

gimlet



BARでの最初の、
一杯は、

「[gimlet](#)」

と決めている。

レイモンド・チャンドラーの「長いお別れ」で、

「["I suppose it's a bit too early for a gimlet," he said.](#)」

と[私立探偵フィリップ・マーロウ](#)が言った台詞だと大概の人は誤解している。

「本当のギムレットはジンと[ローズ社製のライム・ジュース](#)を半分ずつ、他には何も入れない」という記述もある（ここで言われるローズ社のライム・ジュースは[コーディアルライム](#)の事である）。



「あんたがいけないのよ」
そう、直子は俺に詰めよった。

Bar「浪漫倶楽部」のマスターが失踪したのだ。
借金がかさんだとか、愛人と逃避行したわけではない。

エリさんは、マスターの代わりにシェイカーを振っている。
今日の俺の一杯目だった。

まだ陽が落ちる、午後4時半。
まだ、Bar「浪漫倶楽部」が開店する時間まで30分早かった。

俺は地域情報誌で編集・ライターをしている。

発行部数も伸び悩み、おかげで広告収入も目途が立たず、発行停止寸前の情報誌をなんとかしようと思っていた。

そして、今まで紹介してこなかったBar「浪漫倶楽部」を弊誌で紹介したのだった。地元は元より、遠方からも噂を聞きつけた俄か酒飲み達が数多く訪れるようになった。店は依然にも増して繁盛したが、大事な何かを失った。

それは、俺自身の心とマスターの魂だった。

いつも、[Bill Evans](#) が架かっていた。

[Polka Dots And Moonbeams](#)

The Bill Evans Trio

C'est la vie!



疲れた夜。
マスターはいつもこのカクテルを作ってくれた。
しかし、
レシピは教えてくれないままだった。

俺は、その「生命の歓喜」（Joie de vivre）と名のカクテルを飲みたくて、

失踪したマスターを探す旅に出ることを決めた。

そして、その雑誌社を辞め、フリーランスのライターとして、
搜索&全国のBARを取材するようになる。

早速、BAR「浪漫倶楽部」のマスターは、
どこかの雪国にいるという情報が入り、
そこで、
憂いた酒飲み達に

「生命の歓喜」 (Joie de vivre)

のカクテルを作っているという。

エリさんは、
三杯目のカクテルは何にすると聞いてきた。
思わず、

「C'est la vie!」 (それが人生さ。)

と言って、
店を出た。

雪国

雪国での搜索は難航した。

確かに「浪漫倶楽部」のマスターはこの土地に足を踏み入れたようだった。

小さな町だったが、意外と飲み屋は多い。この町は日本いや世界で通用する研磨技術を持つ工場が多いと聞いた。

新しいアウトドアメーカーのスノーブーツを買って行ったが、

不慣れな雪国では、ただのよそ者だ。

身動きが思ったように取れない。

夜の街を徘徊しているうちに、一件の居酒屋で情報を聴きつけた。

どうやら、マスターはこの町に一件ある、ジャズ・ピアニストが経営するバーに現れたという。

俺は、情報をとりに何軒も梯子したので、この土地の有名な日本酒で酩酊しかけていた。

確か「[張鶴](#)」という酒だったか・・・

近くのビルの二階にあるということを知り、行って見る事にした。

ふと、車中で読んだ、宮本輝の作品の文中に

「現代人には二つのタイプがある。見えるものしか見ないタイプと、見えないものを見ようと努力するタイプだ。

現場から発しているかすかな情報から見えない全体を読み取りなさい。」

(宮本輝著 「[三十光年の星たち](#)」文中より)

という文章が思い浮かんだ。





大方の予想どおり、「浪漫倶楽部」のマスターはこの土地に舞い降り、そして、ピアニストがやっているバーでシェイカーを振ったようだ。

「Bar Midnight」はこの町に唯一あるJAZZバーで、マスターは[オスカー・ピータソン](#)並みに弾くピアニストらしかったが、腕の怪我でNYから、この小さな町に戻りバーを開いたのだった。饗に乗ればお客のリクエストに答えてピアノを弾いてくれるそうだが、なにせ一人でこの店を切り盛りし、バテンダーも兼ねてるので、ほんのたまに暇な時間にしか弾かないと言う。

マスターはチョビ髭をたくわえており、[トニー谷](#)を思わせるが、本人は[ビル・エヴァンス](#)のつもりらしかった。

俺は、マスターにギムレットをオーダーし、「浪漫倶楽部」のマスターが訪ねて来たか聞いてみた。

やはり、ここに突然来て、「シェイカー振らせてくれないか？」と訪ねて来たらしい。店の客も驚いたが、突然やって来た白髪の老人にシェイカーを振らせる分けにもいかなかったが、

丁度、店のマスターもピアノが弾きたくて指が蠢いていたので、「浪漫倶楽部」のマスターにカウンターに入ってもらったと言う。

そして、俺は何を作ったか聞いたが、ピアノを弾いていたので分からないと言い、「弾いたピアノの曲なら憶えているがね。」

と答えて、オーダーしたギムレットをカクテルグラスに注いでくれた。

俺は三口でそれを飲み干し、この自慢のカクテルをオーダーした。

他に「浪漫倶楽部」のマスターの情報を聞き出したかったからだ。

「Bar Midnight」のマスターは、

「ここは、雪国だから“雪国”というカクテルはどうかね？」と尋ねた。

俺はそれでいいとあまり考え深くもなく答えた。



店の広さには似合わないグランドピアノが置いてあった。
客も俺一人になり、「浪漫倶楽部」のマスターの事を聞きかけた時、
この店「Bar Midnight」のマスターはおもむろにピアノの前に行き、
「[枯葉](#)」と「[酒とバラの日々](#)」を弾いた。
確かにオスカー・ピーターソン並にミスタッチのない演奏だった。
俺は拍手の代わりに、
マスターに一杯勧めた。
断るかと思ったが、[シングル・モルト](#)を棚からおろし、ストレートグラスでぐいっとやった。
「ところで・・・」
と言いかけた時、マスターはまたピアノに向かいやがった。
今度も聞き出せなく、「[身も心も](#)」を弾き出しやがった。

BAR「浪漫倶楽部」では、エリさんがグラスを磨いていた。

あれから、店は開けていたが、客はまばらで、ウイスキーの樽から漂うオーク材の香りや何百種類と置いてあるウイスキーやリキュールやスピリッツ、ワインなどの瓶のコルクの隙間から、そこ儂く零れる香りで、店の空気感は、より一層緊張感を与え、半地下になっている小部屋からは、[ブルーグラス](#)の曲をつま弾いてる痩せ細った男がいるだけだった。

エリさんは、BAR「浪漫倶楽部」のマスターの一人娘で、アパレル関係の会社でOLをしていたが、マスターの突然の失踪で、急遽カウンターのなかへ立ちバーテンドレスとして、店を守ることになった。

エリさんは、酒に対しては俄か知識はあったが、店に出入りしたこともなく、もっぱら他の店で飲み歩いていて、酒の飲酒量や酒の種類に関しては、そこらへんの酔狂なやつにも、一目置かれていた存在だった。

店のドアには、「ややこしいカクテルをたのむ客、いちゃつくカップル、昔話をゴタゴタ述べるジジイ、などのお客お断り」の張り紙がしてあった。

エリさんは、この辺では、ちょっとした美貌で人気者であったが、ヤンキーであったとの噂もあった。

バーのつくりは、半扇型の椋の木のカウンターがあり、10席の椅子があった。

その後ろには、立ち飲み客用の丸いテーブルが二つあった。

酒は、シングルモルト・スコッチ・バーボン、テキーラ・ラム・などが数百種類、カウンターの後ろとバックヤードに、整然と並べてあり、半地下の小部屋にはヴィンテージ・ワインが貯蔵されていた。

酒のつまみは、ほとんど置いて無く、[オイルサーディン](#)と[牡蠣のマリネの缶詰](#)と、[鮭冬葉](#)とシカ肉の燻製、それとチーズが3種類（[ゴルゴンゾーラ](#)、[ブルサン](#)、[ルクレット](#)）、あとはナッツぐらいしかない。



Blueglass

店のBGMはない。

ないのだが、時折、半地下になっている小部屋からギターの色音が聞こえる。

ギターを弾くのは、やせ細った男で、名前も知らないが、[ブルーグラス](#)を好んでよく弾いていたので、

みんなは、「草」と呼んでいた。

やつは[ポルトガルワイン](#)をよく飲んでいただようだ。

やはり、「浪漫倶楽部」のマスターのお気に入り、たまに演奏するのを許していたのだろう。

マスターは音楽的な蘊蓄もあり、いろいろな音楽の中で、なぜ彼の演奏だけ許したのかはわからない。

ただ、酒呑み達の邪魔にならず、店の雰囲気貢献していたようだった。



「BAR midnight」では、マスターのピアノのお披露目は終わった。

マスターはバーカウンターの中に戻り、白いバージャケットに身を装い、
ピアニストからバテンダーになりかわる準備をしていた。

ふと、カウンターの端を見ると、髪の高い女が煙草に火を点けていた。

マスターに「いつもの」と酒をオーダーした。

マスターは、おもむろにショートカクテルグラスを出し、

ビーフィータジン3/1

チンザノベルモットエクストラドライ3/1

アイリッシュミスト3/1

を用意し、それらを適量ずつシェイカーに入れ、振りかざすと
女は二本目の煙草に火をつけた。

小刻みよくシェイカーはふられ、
彼女の前に差し出されたショートグラスに注がれた。

琥珀色の「[ミスティ](#)」だった。



俺は、

[Ella Fitzgerald - Misty](#)

を思い出していた。

この店にはこの曲はかかってなかったが・・・

店には、「BAR midnight」のマスター、髪の毛の長い女、俺の三人になった。

先程のピアノを披露していた「BAR midnight」マスターは無口な「BAR midnight」バテンダーとしてもどり、

やや神妙な面持ちでこちらをうかがう髪の毛の長い女、探偵きどりで人の搜索にやって来た俺。

店は重苦しい空気を漂いだした。

女の紫煙と俺の紫煙がその空気感を象徴したかのように、紫煙が流れてゆく。

「あの・・・」

お互いがそのように声をかけたようにみえたが、俺は「人の搜索」（のつもり）で、女は只の見知らぬ客だったのが不思議そうに、声をかけたただけだった。



JazzMeBlues

「[Bix Beiderbecke](#)に捧ぐ」

■[ビックス・バイダーベック](#)が活躍したのは、1920年代のこと。アメリカの禁酒法時代。

いわゆる、華麗なるギャツビーの「ジャズ・エイジ」だ。そんな時代だったのに、ビックスは酒好きで、しかもとんでもなく大酒飲みだった。

1929年。大恐慌がやって来る。ビックスがポール・ホワイトマン楽団の地方巡業で稼いで銀行に貯め込んだ貯金も、すべて水の泡となった。あとは、破滅型ジャズマンおなじみの転落の道まっしぐら。アルコール中毒が進行し、まともにラップも吹けなくなってしまって、ニューヨークの友人のアパートメントに転がり込んだバイダーベックは、弱り切った身体を肺炎にやられ、あっけなく死んだ。享年28。

<http://p.booklog.jp/book/108778>

著者 : jazz me blues

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/humanforest/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/108778>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/108778>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ